

教育研究業績書

教育研究業績書

令和8年4月30日

氏名 高田 拓人 印

研究分野	研究内容のキーワード
運動器理学療法	変形性関節症、ACL 損傷

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 (1) 運動療法概論	2026年4月～	理学療法学科1.2年生を対象に、運動療法実施時における生理学的機序や、注意点などに対する講義を行った。
(2) 臨床医学	2026年4月～	理学療法学科2年生を対象に整形外科領域における画像(MRI、X線、CT)の見方について講義を行った。
(3) 整形外科学	2026年4月～	理学療法学科2年生を対象に整形外科疾患に対する特徴、所見、理学療法について講義を行った。
(4) 理学療法評価学 V	2026年4月～	理学療法学科2年生を対象に整形外科疾患、中枢疾患におけるそれぞれの動作の特徴、動作分析などの講義を行った。
2 作成した教科書, 教材 (1) 特記なし	特記なし	特記なし
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 特記なし	特記なし	特記なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 特記なし	特記なし	特記なし
5 その他 (1) 特記なし	特記なし	特記なし

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格, 免許 (1) 理学療法士免許	2018年取得	特記なし
(2) Postural restoration provider	2022年取得	特記なし
2 特許等 (1) 特記なし		特記なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 障害予防講座開催	2023年5月30日	千葉県内の高校生ラグビー部に対し「タックル講座」と称し、障害予防のための知識やエクササイズを指導した
(2) 医療法人 紺青会 船橋整形外科病院	2018年4月～ 2020年6月	一般病棟での勤務経験:主には整形外科手術全般に対するリハビリテーションに従事した
(3) 医療法人 紺青会 船橋整形外科市川クリニック	2020年6月～202 5年3月	外来での勤務経験:主には整形外科全般に対するリハビリテーションに従事した
研究業績等に関する事項		
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は発表の年月
(学術論文) (1) 人工股関節全置換術後早期における主観的脚長差の有無が術後3週時の日常生活動作および満足度へ与える影響	共著	理学療法の科学と研究 12.1 (2021): 12.21-12.24
(その他) (学会発表) (2) 人工股関節全置換術後早期における主観的脚長差の有無が術後3週時の日常生活動作および満足度へ与える影響	共著	第23回千葉県理学療法士学会 【目的】THA(Total hip Arthroplasty)術後早期における主観的脚長差の有無が術後3週時に日常生活動作や満足度へ及ぼす影響を明らかにすることである。【方法】2018年7月～9月に片側THAを施行した31名を対象とした。術後3日目における主観的脚長差の有無で2群(有16名/無15名)に分類し、術

		<p>後3週時における日本語版 Lower Extremity Functional Scale (LEFS), 歩行時の大腿部痛および日常生活への不満足度を visual analogue scale (VAS)にて調査した。これらの調査項目を2群間で群間比較を行った。【結果】THA術後3週時の各測定項目にて, 主観的脚長差無し群が主観的脚長差有り群よりも良好な値を示した。【考察】THA術後早期から主観的脚長差を改善することで, 術後3週時の LEFS 改善や歩行時大腿部痛の改善, 満足度向上につながると思われる。</p>
<p>膝前十字靭帯再再建術後におけるスポーツ復帰についての調査 -スポーツ復帰調査アンケートを用いた検討-</p>	<p>共 著</p>	<p>JOSKAS/JOSSM meeting 2021 (Web 口述)</p> <p>【目的】ACL 再再建術 (Revision ACLR) 後は初回 ACL 再建術 (Primary ACLR) 後と比較し, IKDC やスポーツ復帰率の低下が報告されている。しかし, Revision ACLR 後のスポーツ復帰に関して詳細な報告は少ない。本研究目的は当院における Revision ACLR 症例のスポーツ復帰の詳細について, スポーツ復帰調査アンケートを用いて検討することである。</p> <p>【方法】2013年3月~2018年3月に当院において Primary または Revision ACLR を施行し, 術後12ヶ月まで経過観察可能で, かつ術後12ヶ月時にスポーツ復帰調査アンケートを実施できた84例とし, Revision群(R群)10例(男性5例, 女性5例, 平均年齢18.0歳, 身長166.0cm, 体重63.0kg)と Primary群(P群)74例(男性18例, 女性56例, 平均年齢18.8歳, 身長163.1cm, 体重61.8kg)に分類した。除外基準は, 複合靭帯損傷例, 反対側損傷例, 社会的要因によりスポーツ未復帰例とした。検討項目はスポーツ復帰調査アンケートを活用し, ①スポーツ復帰の有無, ②復帰時期, ③復帰例の復帰後主観的パフォーマンスレベル(0-200%), ④未復帰例の復帰阻害因子(痛み, 筋力不足, 不安感, 社会的要因, その他の中から選択)とした。統計学的処理は①をX2検定, ②および③を2標本のt検定・Mann-whitneyのU検定を用いて比較した。有意水準は5%とした(統計ソフトR2.8.1)。</p> <p>【結果】スポーツ復帰率はR群70%(7/10例), P群79.7%(59/74例)であり, 復帰時期はR群(12ヶ月), P群(10ヶ月)にて両群間に有意差を認めなかった。復帰例の主観的パフォーマンスレベルはR群64.2%, P群74%でR群が有意に低値を示した(<math>p&lt;0.05</math>)。R群の未復帰例における阻害因子は筋力不足が66.6%でP群に比べ多い傾向であった。【結</p>

		<p>論】R群とP群のスポーツ復帰率、復帰時期に有意差はなく、R群の復帰例は復帰後における主観的パフォーマンスレベルが低値であった。また、R群の未復帰症例では、筋力不足を自覚している症例がP群より多かった。</p>
--	--	---